

Title	景気変動論前史
Sub Title	
Author	武村, 忠雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1938
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.32, No.12 (1938. 12) ,p.1587(1)- 1624(38)
JaLC DOI	10.14991/001.19381201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19381201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代の經濟

初冬號

定價十五錢 郵稅五厘
郵券代用 十六錢
一箇年 一圓八十錢

戰爭と人口……………寺尾琢磨

商店街の話……………奥井復太郎

經濟地理的に見た支那……………小島榮次

時事解説

滿蒙移民計畫とは何か……………三邊清一郎

統制經濟と株式取引所……………鈴木保良

論壇プロムナード……………永田清

如何にして學ぶべきか……………加田哲二

次號豫告——昭和十三年を送るに際し、次號は、多端なりし今年度の事變經濟を回顧し、檢討し、更に將來を展望すべく、加田先生を座長に、奥井、寺尾、金原、高木、永田の諸先生の舌端火を吐くが如き愛國の座談會記事を中心に、永田先生の「事變經濟の展開」と、高木先生の「事變財政の進展」とを以て、事變經濟展望特輯號とした。御愛讀を乞ふ次第である。

社版出應慶

東京芝區三田
一丁目番地

電話三田 二七九一
振替東京 一五八〇一

三田學會雜誌 第三十二卷 第十二號

景氣變動論前史

武村忠雄

景氣變動論史を研究するに當り、吾々はそれを如何なる立場から研究するかを豫め斷つて置く。吾々は單に過去に如何なる景氣變動論が存したかを知らんとする靜觀的立場に終始せんとするのではない。寧ろ靜觀的立場を媒介とし、更にそれを超越して動的な實踐的立場に移行せんとするのである。換言すれば、初期資本主義、自由資本主義、獨占資本主義等の過去の資本主義經濟構造を對象とする景氣變動論の史的發展を知ることだけが目的なのではない。寧ろこの研究を媒介として現在の資本主義經濟構造即ち統制經濟を對象とする景氣理論を樹立し、更にこの理論的認識を媒介として景氣政策を樹立することを自己目的とする。過去が現在を介して將來に結び付く如く、景

氣變動論史も景氣理論を介して景氣政策に結付く。實踐即ち政策を最高位とする學史と理論と政策の三位一體的立場からして景氣變動論史を研究するのである。

斯かる立場より景氣變動論史を研究する以上、それは景氣變動論史たると同時に景氣理論の媒介體であり、歴史的なものであると同時に論理的なものでなければならぬ。勿論前者は過去に存した種々なる景氣變動論の解説を課題とし、後者は現在の景氣現象に関する理論體系の樹立を課題とする點に於て相互に異なる。然し前者が後者の媒介體たり得るには、過去の諸景氣變動論のジックザックな歴史的発展の内に、一つの偉大なる理論體系の必然的な展開を見出さなければならぬ。即ち過去の歴史の流れの上に現れた個々の景氣變動論の内に景氣理論體系を樹立する諸契機を見出すと共に、更に歴史的偶然に制約されながら順次に現れ來つた諸景氣變動論の發展の内に、景氣理論體系を構成する諸契機の必然的展開を見出さなければならぬ。

既にヘーゲルは斯かる態度に於て哲學史を研究してゐる。彼は哲學史の研究を以つて哲學諸體系の歴史的發展の内に論理的展開を、即ち抽象的眞理から具體的眞理への展開を見出すにあつたとし、次の如く述べてゐる。『吾々は論理的理念の種々の段階を哲學史に於て、順次に現はれた哲學の諸體系の内にみる。そしてこれ等諸體系の孰れのものも絶對者の何等かの特殊定義をその根柢に置いてゐる。さて論理的理念の展開が抽象的なものより具體的なものへの進展として證示されるが如く、哲學の歴史に於ても亦最も先に現れた諸體系が最も抽象的、從つて同時に最も貧しきものである。然し乍ら、先の哲學體系と後のものとの關係は一般に、論理的理念の先の段階と後の段階との

關係、即ち先のものを後のものが止揚されたものとして内に含むと云ふ關係と同じである。このことが哲學の歴史に於て現はれ、而も屢々誤解された所の、或る哲學體系を他のものによつて、更に詳しく云へば、先の體系を後のものによつて反駁することの眞の意味である。或る哲學の反駁が語られる時、普通には先づ反駁が抽象的否定的意味にとられる、それ故に、反駁された哲學はもはや妥當せず、除外され、且つ捨て去られる。果して然りとせんか、哲學の歴史を研究することは全くきめな仕事と考へられねばならぬであらう、と云ふのは、この研究は時代の經過が産んだ凡ての哲學體系が如何にその反駁を見出したかを教へるからである。さて然るに、凡ての哲學思考が反駁されることが認容されると同じく、同時に又、如何なる哲學も反駁されないこと、尙ほ又反駁され得ないことが主張されねばならぬ。この後のことは二重の關係に於てさうである、蓋し一つは、哲學の名に價する如何なるものも理念一般をその内容とし、一つは、如何なる哲學體系も理念の發展過程に於ける一特殊契機若しくは一特殊段階の敘述であるからである。故に或る哲學の反駁は唯その制限を踏み越えること、並びにその特定原理の一つの觀念的契機に引下げると云ふ意味を有するに過ぎぬ。斯くて哲學史はその本質的内容よりみれば、過去のものを取扱はず、永遠なもの及び絶對に現存するものを取扱はねばならぬ、そしてその成果に於ては人間精神の誤謬の陳列場ではなく、却つて神々の諸相のパンテオンに比せらる可きである。……ところで、哲學史の内に生ずるその内容の展開がどこ迄論理的理念の辯證法的展開と一致し、又背馳するかを綿密に證據立てるのが常に哲學史に任される。』と(エンチクロペディ、第一部論理學、八六節、補遺二)

擬て歴史的発展の内に論理的展開を見出さんとする立場は、ヘーゲルにあつては、絶對的觀念論によつて根據づけられてゐる。即ち彼によれば、一切の事象は絶對的理念の外化であり、絶對的理念は論理的必然性を以つて自己展開をなす以上、その外化たる一切の事象の發展、例へば哲學體系の歴史的発展の内に論理的展開を見出し得るのである。然し景氣變動論の如き經驗科學を問題とする限り、斯かる經驗科學の基礎に經驗を全く超絶した絶對的理念を指定することは出来ぬ。吾々は寧ろヘーゲルの絶對的理念の代りに經驗によつて制約されてゐる人間主觀を置き、斯かる人間學的立場からして、歴史的発展の内に論理的展開を見出さんとする立場を根據づけなければならぬ。蓋し人間主觀に於ける論理的展開、即ち思惟の展開過程は次の経過を辿る。

A 認識論以前

a 思惟の對象は個々の經驗的事實

b 思惟の方法は無批判的

吾々が主觀に備はる思惟活動によつて對象を認識する場合、最初は感性を通じて主觀に與へられた個々の經驗的事實を直接思惟の對象とする。而もその際思惟の方法に就いて反省することなく、無意識の内に何等かの思惟方法を用ひて對象を認識する。

B 認識論以後

a 思惟對象の抽象の一般化

b 思惟方法の意識的批判

最初猪突的態度の認識が繰返されてゐる間に、總て夫々特殊性を具備する個々の經驗的事實から思惟により一定の共通のモメントを抽象し、一般化し、これを思惟の對象とする。従つて思惟對象は最早經驗的事實そのもの（經驗對象）ではなく、經驗的事實を基礎とする思惟構成物（認識對象）である。而も無意識の内に一定の思惟方法を用ひて認識を繰返してゐる間に、總て思惟方法そのものを意識的に吟味し、批判するに至る。ところで意識的に吟味された思惟方法として吾々は次の如き方法を挙げ得る。

一 感性——現象

肉體的に制約された人間主觀が對象を認識するには、先づ肉體に備はる感覺器官によつて對象と接觸し、この感覺器官の作用（感性）によつて對象そのものではなく、對象が吾々の主觀に寫し出された所のもの、即ち對象の現象を獲へる。例へば景氣變動なる對象を認識する場合、先づ吾々は感性によつて價格、生産、金利、通貨、投下資本、株價の變動等多様な現象を獲へる。斯かる現象は頗る多様であると共に絶へず變化するものである。この多様な現象が存する限り常に一般に存すると共に、その絶えざる變化を常に内面から規定する所の本質即ち法則を把へることが法則設定科學の課題である。然し感性は多様にして變化する現象を把へ得るにとどまり、法則を直ちに把へることは出来ない。だが一方に於て感性によつて把へられた雜然たる現象の内には、後に思惟の反省作用によつて明瞭に認識される一般性、法則性が既に萌芽的に、素材として與へられてゐる。

二 思惟——本質

思惟は斯かる多様にして變轉する現象を整理し、秩序づけ、その内に法則を見出さんとする。然し思惟は一氣呵成に多様性の統一たる現象を整理し得るものではない。最初は與へられた現象の持つ多様な規定の内でも、その現象にとつて最も根本的な、最も單純な、最も一般的な規定のみを抽象し、孤立させ、それ自ら獨立に存するものと看做し(同一性の立場)、それから思惟し始める。例へば資本主義は最も發達した商品生産社會であり、従つて資本主義的諸現象は商品を最も根本的な、單純な、一般的規定として常に含む。それと同じく、資本主義社會に特有な景氣變動現象も亦常に商品なる規定を含む。而も商品は一定價格を以つて販賣されるものなるが故に、價格なる規定が景氣現象の最も根本的な、單純な一般的な規定である。それ故吾々は先づ價格變動なる現象面のみを抽象し、これを獨立に存するものと看做し、何故價格變動が起るか法則を思惟の反省作用によつて明かにせんとする。然し價格變動に固執する時は、價格は交換即ち流過程に於て成立する故、景氣變動の原因を流過程の一面にのみ求めることになる。然し流過程なる抽象的一面性に固執する時は矛盾に陥らざるを得ない。と云ふのは、景氣變動は流過程と同時に生産過程の内にもその原因を持つが故である。従つて思惟は流過程のみに原因を求むることを否定し、それと對立する生産過程に原因を求めるに至る。然し思惟が一規定を否定する場合、全然それを否定し去るのではなく、否定すると同時に肯定するのであり、即ち、止揚するのである。換言すれば流過程のみに景氣原因を求めることは否定されるが、生産過程との統一に於ける流過程、即ち再生産過程の一環としての流過程

程に景氣變動の原因を求めることは肯定される。

斯くて思惟は最初現象の多様な規定の内、單純な抽象的一規定に固執し、一規定に固執する結果矛盾に陥り、逆に對立的規定を思惟するに至るが、その際同時に先の規定を保有し、對立的規定と統一して思惟す。換言すれば、單純な抽象的規定から複雑な具體的規定へと思惟を向上させることにより、順次に多様性の統一たる現象を整理し、現象そのものを律する法則の把握に近づく。

三 實踐——本質と現象との統一

然し斯くて設定された法則即ち本質は主觀の思惟操作によつて設定されたものであるにとゞまり、果してその法則が主觀の外部に存する客觀的實在そのもの、法則に一致するや否やは不明である。従つてその法則の客觀性を檢證する爲には、主觀が客觀的實在に働き掛ける實踐活動、即ち政策遂行に訴へなければならぬ。即ち何等かの實踐、政策目的を客觀的に實現せんとする場合、その所期の目的を實現するに如何なる手段を選ぶかを主觀内の思惟活動によつて得た法則に基づいて定め、その手段を用ひて主觀が客觀的實在に働き掛けた結果、主觀の思惟の所産たる法則に従つて豫測してゐた通りの結果が現象として感性を通じて主觀に與へられるならば、その法則の客觀性が證明される。

然し實踐によつて法則の客觀性を檢證する場合、吾々は常に次の困難に直面する。即ち吾々は頗る多様な現象の諸規定を凡て思惟することは出来ぬ。寧ろ個々の現象の特殊性を或る程度抽象し、共通の條件を假定し、その條件

の下で法則を設定する。従つて法則はその共通の條件の下に於てのみ絶対的妥當性が主張される。然るに實踐、政策は一定の特殊な具體的現象に對して働き掛けるものであり、その具體的現象は、法則を設定する場合に假定された共通の條件以外に、更にそれ自身に特有な條件を含んでゐる爲、往々その特殊條件の爲に法則の作用が妨げられることがある。それ故吾々の思惟によつて設定する法則は、具體的現象の一面の把握、即ち客觀的ではあるが相對的な認識たるにとゞまる。換言すれば、その法則は具體的現象の實在的可能性即ち相對的必然性を示すにとゞまり、決して絶対的必然性を示すものではない。

それ故實踐は法則の客觀性、即ち本質と現象の統一を検證するが、それと同時に本質と現象の對立を、即ち法則の相對的客觀性を檢證す。斯くて實踐は一方に於て法則が相對的客觀的真理であり、現實の具體的現象とは矛盾することを明かにし、これによつて更に思惟をしてその矛盾を克服す可く、より具體的思惟へと向上せしめる。それと共に他方實踐は對象そのものを變革することにより、新たな現象を生み出し、思惟に新たな認識對象を提供する。

感性、思惟、實踐の交互作用を通じて、吾々は思惟を抽象から具體へと向上させ、法則と客觀的實在とを統一させると同時に兩者の間に矛盾を見出し、斯くて相對的必然性を示すにとゞまる法則を無限の彼岸に於て絶対的必然性を示す法則に接近せんとする。

斯く人間主觀に於ける論理的展開、即ち認識の展開過程は抽象的一面性の矛盾を止揚して具體的多面性へと向上

する以上、個々の主觀に於ける論理的展開の集大成たる思想史全體の發展過程にも亦斯かる展開を見出し得る。例へば景氣變動論史なる歴史的發展過程全體の内にも論理的展開を見出し得る。

A 景氣變動論前史

a 研究對象は個々の經驗的事實としての恐慌

b 研究方法は無批判的

恐慌が景氣循環過程の一環として周期的に現はれるやうになつたのは、十九世紀初頭英國に於て自由資本主義が確立されて以後のことであり、より正確には一八二五年以後である。それ故恐慌の周期性、従つてその法則性は十九世紀以後に於て初めて問題とされ得るのである。然るに十八世紀の初期資本主義に於ても、既に政治的諸原因により、偶發的な經濟過程の攪亂として恐慌現象が存した。そしてこれ等現象が科學的研究の對象として取扱はれた。然しその恐慌は一回的な個々の經驗的事實たるにとゞまり、單なる經驗對象に過ぎぬ。即ち未だ周期的に繰返し現はれる多くの恐慌現象から思惟によつて共通のモメントを抽象し、恐慌の定型を構成し、認識對象を設定することは出来なかつた。一八二五年以後恐慌の周期性が現はれたにせよ、十九世紀前半に於ける古典派經濟學者は未だ恐慌の周期性を充分經驗してゐなかつた爲に、恐慌を完全な科學的認識對象とすることは出来なかつた。勿論既に彼等は個々の經驗的事實としての恐慌ではなく、抽象化された恐慌一般を取扱つてゐる限り、認識對象への移行が認められる。然し彼等は恐慌を景氣循環過程から切り離し、そのみを獨立に對象とせる故、恐慌の周期性、

従つて法則性なる法則科學の認識對象を設定し得なかつた。

又十八世紀から十九世紀前半にかけては、研究方法も無批判的であつた。ニコライ・ハルトマンが述べてゐる如く、『方法そのものが豫め存し、それが實際に用ひられるに對し、方法の意識は二次的である』。經濟學も亦初め無意識の内に一定の方法が用ひられ、或る程度研究の成果が擧げられて後初めて方法論的研究に興味が向けられたのである。十八世紀の經濟學者は勿論、古典派經濟學者と雖も、その方法に對しては無批判的であり、漸く後期古典派經濟學者、特にシイニイオア、ジョン・スチュアート・ミルに至つて初めて方法論が意識的に批判されたにとゞまる。シイニイオア、ミルを除き、多くの古典派經濟學者は無批判的に主として演繹法に頼り、均衡經濟體系を前提とし、それより諸經濟法則を演繹した。然し斯かる研究方法を以つてしては經濟體系の一般的均衡破壊としての恐慌の必然性を演繹することが出來ず、矛盾に墜入る。

B 景氣變動論史

a 研究對象が恐慌からそれを一環として含む景氣變動へと擴大されると共に、景氣の循環法則一般を對象とす。

b 研究方法が意識的に批判さる。

蓋し十九世紀後半に於ては既に恐慌の周期性を充分に經驗するに至つた結果、恐慌が景氣循環過程の一環として現はれることが明瞭に認識され、研究對象も恐慌から景氣循環の法則把握へと擴大された。それと共に、古典派の

均衡體系から一般的均衡攪亂たる恐慌の必然性を演繹せんとする方法の矛盾せることも明瞭に意識された。茲に景氣變動論前史は終り、景氣變動論史が始まる。

一、事實の記述と理論的分析の混合(混合理論)——現象論

研究對象を初めて恐慌から景氣變動へ、更に景氣の循環性へと擴大した者はデュグラである。勿論彼以前に於ても、既にロード・オーバーストンの如きは景氣循環の存在を認めてゐるが、デュグラこそ初めて一八六〇年出版の『商業恐慌とその周期的循環』に於て、景氣變動を明確に研究對象とするに至つた。そして彼は多くの追隨者を見出したのである。例へば、ツガン・バラノウスキー、ブニアチヤン、アフタリオン、レキユール、シュビートホーフ、更にはレーデラー、カツセル等である。彼等の多くは、古典派經濟學者の演繹的研究方法の矛盾を意識的に批判し、これに代ふるに、歴史派經濟學の影響の下に、歸納法を以つて恐慌論更に景氣變動論の正しき研究方法なりとした。即ち古典派の經濟學者の如く、均衡的經濟體系から一般的均衡破壊としての恐慌を演繹することは全く不可能であり、寧ろ多くの恐慌に關する經驗的事實を蒐集し、比較し、分類し、それから恐慌の類型を見出し、この類型から恐慌の必然性、周期性等の法則を歸納す可きであると。

斯く演繹法を批判し、その代りに歸納法を採用する結果、彼等は現象の世界以上に出ることが出來なかつた。と云ふのは、歸納法は個々の經驗的事實、即ち現象を蒐集し、それ等現象間に類型が見出されれば、それを以つて法則と看做す方法であるからである。それ故歸納法に立脚するこれ等の人々が景氣變動論發展史に於て占める地位

は、丁度認識の發展過程に於ける第一の段階、即ち直接現象そのものの把握をこゝする感性的段階に相應すると云ひ得る。

然し彼等と雖も、恐慌の必然性乃至景氣の循環性等の法則を設定せんと企圖してゐた以上、純然たる歸納法にのみ頼ることは出来なかつたのである。何となれば、歸納法は單に現象の類型を明かにし得るにとゞまり、これに反し、不斷に變動する多様な現象を常にその内面から必然的に規定する本質、即ち現象の法則は把握されないからである。第一に、歸納法は現象即ち現はれ來つたもの(結果)を取扱ふにとゞまり、それを現はさせる原因、即ち根據(本質)を明かにし得ないのであり、因果法則を設定し得ない。第二に、假りに一定現象に次いで他の一定現象が現はれ來ることを幾度か経験したからと云つて、この順次的現象生起の類型を以つて直ちに因果法則と看做すことは出来ない。その類型は單に過去に於けるいくつかの場合に斯かる現象生起の一定順序があつたと云ふにとゞまり、従つて將來にも斯かる順序に現象が現はれ得るであらうとの蓋然性を示すにとゞまる。これに反し常に斯かる順序に於て現はれざるを得ないとの必然性、即ち法則性を示すことは出来ない。寧ろ法則を設定せんとせば、先づ主觀の思惟作用によつて、多種多様な諸現象からいくつかの共通の條件を抽象し來り、それ等條件を與件即ち思惟の前提とし、その前提から思惟作用により法則を演繹しなければならぬ。そしてその法則は右の前提の下に於てのみ必然性を示すのである。斯く法則を設定せんとする限り演繹法に訴へざるを得ぬ爲に、彼等は自己の方法を歸納法なりと稱しながら、實は歸納法と同時に演繹法を暗黙の内に用ひて居つたのである。

斯くの如く、彼等は主として歸納法に訴へながら暗黙の内に演繹法を用ひ、兩方法を混用して居つたが故に、その理論は『混合理論』に外ならなかつた。即ち一方に於て歸納法により、多くの經驗的事實を蒐集し、その類型を記述すると共に、他方に於ては暗黙裏に演繹法により、法則を設定せんとしたのであり、事實の記述と理論的分析とが混合されてゐたのである。斯かる中途半端な混合理論を以つてしては、結局に於て、歴史上に現はれた個々の現實の景氣變動過程を詳細に説明することも出来なければ、逆に景氣變動一般の法則を設定することも出来なかつた。茲に於て直接混合されてゐた事實の記述と理論的分析とは分離されなければならなかつた。直接的同一性は對立性へ轉化しなければならぬのである。

二 純粹理論への復歸——本質論

混合理論の内に含まれてゐた二つの立場、即ち單なる事實の記述と純粹の理論的分析の立場とは應て明確に分離するに至つた。最初は後者の純粹理論の立場が強く前面に現はれるに至つた。斯かる古典派に見るが如き純粹理論への復歸は、丁度十九世紀末に於ける歴史派經濟學から新古典派經濟學への復歸過程を反映するものと看做し得る。蓋し混合理論家の缺點とする所は、主として現象を記述するにとゞまつて、現象の背後に隠れ、現象を内面から規定する本質(法則)の世界を把握し得なかつた點にある。それ故これが反動として、先づ本質の世界のみを把握せんとする純粹理論的立場へ移行したのである。然し法則を設定せんとせば、思惟によつていくつかの與件即ち前提を選定し、それから經濟體系を構成し、その經濟體系から景氣變動法則を演繹しなければならぬ。その際古典派の

なせる如く、思惟構成物たる均衡體系から一般的均衡破壊たる恐慌乃至景氣變動の法則を演繹する時は矛盾に陥る。それ故古典派經濟學者の選んだのは異つた與件を選び、それから恐慌乃至景氣變動と矛盾しないような經濟體系を構成しなければならなかつた。然しその際、與件を非經濟的なものから選ぶ者と經濟的なものを選ぶ者がある。前者はデ・ボンス、ディーツェル、ムアーに見る如く、太陽の黒點乃至土地生産力の規則的變化から景氣の循環性を導き出すとする立場である。然し斯かる立場は景氣變動なる經濟的波動運動を經濟外の要因即ち外生的原因に求めるものであり、外生的原因によつては偶然性が説明され得るのみで、内的必然性即ち法則の樹立は不可能である。茲に於て從來と異つて經濟的與件を選び出し、それから動態體系を構成し、それから景氣循環法則を演繹せんとする。斯かる立場をとる者としては、先驅者たるマルクスに次いでクラーク、シュンペーター、レーヴェ等が挙げ得られる。然し均衡體系に對し如何なる與件を挿入することによつて、それを動態體系に變化せしめ得るか人は人々によつて夫々異なる。その場合動態の根據を流通過程、特に貨幣的要因に求める金融景氣變動論と、それとは反對に、生産過程、特に産業諸部門間の不均衡發展に求めるものと、更に流通と生産の兩過程の統一の内に求めるもの等の立場がある。

これを要するに純粹理論的立場をとる景氣變動論の發展は、その方法論に於ては均衡體系に對する動態體系の設定から、更に進んでは均衡體系と動態體系とを統一せんとする方向を辿り、又動態の要因に於ても、流通過程乃至生産過程から兩者の統一過程の内に要因を求めんとする傾向を辿つてゐる。換言すれば、抽象からその抽象をそれ

自身に含んだ具體へと向上しつゝあつた。

斯かる純粹理論の設定する景氣法則は主觀の思惟によつて選定された一定條件の下に於てのみその絶對的妥當性が認められるのである。そしてその思惟によつて選ばれた條件が客觀的實在そのものゝ一定條件なる限り、その法則は又單なる主觀的法則ではなく、同時に客觀的な法則でもある。然し思惟は現實に存する客觀的實在の凡ゆる條件を思惟の條件とすることは出來ず、その内の特定條件のみを抽象し、それより法則を演繹したにとゞまる故、その法則は現實に絶對に妥當するものではなく、單に相對的に妥當するものである。即ち理論本來の性質からして、その設定する景氣法則が相對的客觀的法則にとゞまることは已むを得ないのである。

然るにこの已むなき理論と現實とのギャップは、特に世界大戰を轉期として資本主義の經濟構造に根本的變化が起り、經濟構造の變化によつてその構造の枠の内に現はれる景氣變動自體の構造も著しく變化した結果、更に擴大された。最早過去の景氣理論を以つてしては全く説明し難い多くの現實の景氣現象に直面するに至つた。その結果、相對的客觀的法則を設定し得るにとゞまる理論本來の性質が看過され、全く理論は現實の景氣現象を説明し得ざるものとして否定され、逆に純然たる個々の經驗的事實としての景氣に關する統計的研究が企圖されるに至つた。且つ統計的研究により景氣變動過程の定型を見出し、この定型を個々の景氣過程に當はめ、景氣の豫測を行はんとする。例へばミッチェル、ワグマン等は斯かる立場をとる。勿論斯かる立場は外面的な現象の世界を取扱ひ、蓋然性を云々し得るにとゞまり、内面的な本質の世界を取扱ひ、必然性即ち法則を問題とするものではない。

然し純粹理論からその反動としての統計的研究への移行は、單に景氣理論の否定と考へることは出来ない。既に統計的研究はそれ自身より高い理論への道を準備するものである。蓋し理論の設定する法則は主觀内部の思惟操作によつて得られたものであるが故に、その主觀の所産たる法則が果して客觀的實在そのもの、法則であるか否かを檢證しなければならぬ。これが檢證に當つては、吾々は從來の理論的態度から一步進め、實踐的態度をとらなければならぬ。即ち一定目的をたて、その目的を實現せんが爲に如何なる手段を選ぶ可きかを決定する際、理論の示す法則に従つて一定手段を選び、客觀的實在に働きかけたところが、法則に従つて豫測した通りのことが現象となつて吾々の感性に迄現はれて來たならば、その法則は客觀的法則なることが檢證される。それ故實踐即ち政策は理論をして理論たらしめる終局の行爲である。然し自ら實踐し難い場合は、これに代ふるに豫測なる手段に訴へ、理論の示す法則通りの結果が將來現象として現はれ來たるならば、同様法則の客觀性が檢證される。それ故に又景氣豫測は景氣理論をして景氣理論たらしむる所のものである。茲に理論は從來の單に主觀の思惟操作にとゞまる所の純粹理論から、進んで理論を現實の客觀的實在に一致せんとする所の具體的理論へ發展する準備がなされたのである。

三、具體的理論への道——實踐論

斯くて現實の景氣現象と一致する所の具體的景氣理論の樹立が企圖されるに至つた。斯かる企圖は、素朴な形に於ては、既にルツツ、カレル、ナイザー等によつてなされてゐる。彼等は複雑多様にして常に同一な姿に於て現は

れ來たらざる景氣現象に就いて、法則を樹立することは不可能であるとし、寧ろ一般理論經濟學の與へる諸經濟法則を用ひて個々の現實に與へられた景氣現象を説明することに景氣變動論の課題を限る可きであると主張す。即ち景氣法則の樹立を否定するが、現實の景氣現象を説明せんとする。然し斯かる立場は折角現實的認識に近づかんとしながら、理論と現實とのギャップの前に立ち陳んでしまつてゐる。勿論理論は頗る多様な規定の統一たる現實から一定の規定のみを抽象し、それを前提として法則を演繹するのであるから、その法則通りに現實は變動するものではない。寧ろ法則演繹の際前提したのとは對立した規定が時に現實に含れてゐるが爲、法則通りに現實は變動しない。この理論と現實とのギャップは假令へ永久に踏越し得ないにしても、吾々は常に一般的规定から次第に特殊的规定を思惟の前提に引入れ、抽象から具體への向上なる思惟の發展により、抽象的法則から具體的法則へと向上しなければならぬ。そして理論の設定する法則を現實に接近させなければならぬ。斯かる具體的景氣理論を樹立するに必要な種々な特殊的规定は景氣の統計的研究が與へて呉れる。即ち各國の景氣研究所が作成する個々の經驗的事實としての景氣變動に關する統計は、吾々が具體的景氣法則を演繹するに當つてその前提として必要な多くの特殊的规定を明らかにして呉れる。

斯くして具體的景氣理論が樹立されれば、それだけ景氣現象に働きかけ、これを一定目的方向に向はしめんとする景氣政策の樹立が容易ならしめらる。そして景氣政策の遂行により、理論の客觀性が檢證される。その際理論と現實のギャップが再び明瞭ならしめられ、その矛盾を克服せんとして更により具體的理論への向上が企圖されると

共に、政策は同時に対象そのものを變容することによつて、新たな種類の景氣變動を理論の対象として呈示する。吾々は、以上述べ來たつた如く、歴史的發展過程の内に論理的展開過程を見出さんとする態度に於て、景氣變動論史を研究する。斯かる景氣變動論史の研究態度は抽象的真理性を持つた景氣理論から具體的真理性を持つた景氣理論への發展を明瞭ならしめるものであり、その結果吾々は從來與へられてゐるものゝ内で最も具體的真理性を持つた景氣理論を見出し得る。そして吾々はこの具體的景氣理論を基礎として、更に吾々の眼前に呈示された新たな景氣現象、例へば統制經濟段階の景氣現象の特殊の規定を顧慮し、以つて現代の景氣理論を樹立することを得るのである。換言すれば、斯かる學史的研究のみが理論的研究と有機的に結合し得るのである。

二

恐慌が景氣循環の一環として周期的に現はれるに至つたのは、十九世紀初葉英國に於て自由資本主義なる經濟構造が確立されて以後である。更に詳しく云へば、一八二五年の恐慌を以つて周期的恐慌の最初のものとして看做するのが定説である。(註一)然し既にそれ以前に於て、假令へ一般的恐慌と云はれ得ないにしても、兎に角恐慌と名づけ得る如き經濟過程の攪亂が西歐諸國に發生したのである。例へば、デュグラ(註二)の指摘する所によれば、英國には一七七二、八三、九三、九七年及び一八〇二、一〇、一五年に、又佛蘭西には一八〇四、一〇、一八、二五年に恐慌が現はれた。

註一 Eugen von Bergmann, Geschichte der nationalökonomischen Krisentheorien. Stuttgart, 1895. S. 1.

註二 Clément Juglar, Des crises commerciales et de leur retour périodique. 1860.

然し一八二五年以前の、特に十八世紀の恐慌は十九世紀のそれと質を異にしてゐる。即ち「佛蘭西に於けるジャン・ローのミッシェル・ビの開発の山師的計畫、それに相應する英國に於ける東印度會社證券の投機、一七六三年の七年戦争後の恐慌、十八世紀九十年代の英佛戦争後の恐慌等は周期的に反覆されたものと看做され得ないし、常に又經濟的に説明す可き現象とも看做され得なかつた。その原因が同一的なものであり、政治的性質のものであるが爲に、一般經濟原理に手がかりを與へなかつた。」(註)換言すれば、十八世紀の恐慌は第一に夫々の場合に於て異なる性質を持ち、同一的な現象であり、第二にそれ等の原因は主として政治的なものであり、従つて經濟過程にとつては外生的な、偶然的な原因であつた。それ故反覆される同一恐慌現象の内に法則を見出さんとする所の、而も經濟的な内生的原因からする必然的法則を設定せんとする所の恐慌理論にとつては、當時尙ほその対象を缺いて居つたのである。

註 Fritz Burchard, Entwicklungsgeschichte der monetären Konjunkturtheorie. in: Weltwirtschaftliches Archiv. Bd. 28. Heft 1. Juli 1928. S. 79-80.

斯くて恐慌理論更には景氣理論はその研究対象そのものを缺いて居つたばかりでなく、これが研究方法をも缺いて居つたのである。蓋し景氣循環の一環としての恐慌を研究するが爲には、それが研究の前提として經濟循環の過程に關する理論、即ち市場經濟の再生産過程の理論が與へられてゐなければならぬ。と云ふのは、景氣變動は市場經濟

濟の再生産過程の波動運動であり、恐慌はその波動運動の一環であるからである。然るに經濟循環過程の理論は、十八世紀の七十年代以後に於て、初めてケネー、スミスによつて體系的に基礎づけられ、そして十九世紀の初葉に至り、セイ、リカードによつて完成されたのである。尙ほケネー、スミスにあつては、恐慌は自由に放任された經濟循環過程の結果と看做されず、寧ろ完全に自由ならしめれば調和が齎される可き經濟過程に對し、マーカンチリズム流に政治的干渉をなす結果起るのであると考へられてゐた。自由に放任された經濟循環そのものから生じ來たつた攪亂として恐慌問題が提起されるに至つたのは、十九世紀になつてセイとマルサスとの間に論争が戦かはされて以後である。

斯く十八世紀には恐慌理論及び景氣理論の展開する可き客觀的竝に主觀的前提を缺いて居つたに拘らず、主に注目された顯著な當時の恐慌なる經濟現象が貨幣側の攪亂に由來する限り、この時代の經濟制度やその理論的所産は一定形態の景氣理論への萌芽を藏してゐたのである。〔註〕即ち金融景氣變動論の萌芽を既に當時に於て見出し得るのである。

註 F. Burchard, Ebenda, S. 80.

この時代は貨幣制度にとつて特に重要な事件によつて劃されてゐる。一つは一六九四年に於ける英蘭銀行の設立であり、他は一七九七年に於ける同銀行の條令による金兌換の廢止である。十七世紀後半に於て、英國の輿論は伊太利や和蘭が通商上繁榮してゐるのは、同國にベニス銀行やアムステルダム銀行があるが爲であるとし、これに倣

つて銀行の設立を希望した。その結果一六九四年英蘭銀行の設立を見るに至つたのである。同銀行は私立銀行として設立されたのであるが、國家に對して貸附を行ふ代償として一定の特權、特に最初は一定額の銀行券發行の獨占權を獲得した。國家に對して貸附を行ふ結果、同銀行は國債の管理者となり、後には國庫の管理者ともなり、最後には國の金準備を集中するに至つた。公債引受と云ふ同様の財政的理由から、兩東印度會社は貿易の獨占權を獲得した。

英國にとつてこの制度は、東印度會社證券の投機による恐慌を除いては、一、三の私立發券銀行が現はれた後と雖も、さしたる動搖を示さなかつた。英國に於けると同様、國家財政を整理せんとしてジョン・ローによつて考案された佛蘭西の紙幣發行銀行の制度（一七一六年設立）は最初は非常な成功を收め、その爲、通貨の膨脹は商業及び貿易に有利な影響を及ぼすとのローの理論が確證されたかのように見えた。この佛蘭西の隆盛に脅れをなした英國は、ローのミシシッピ會社の例に倣つて第二の東印度會社を設立した。然るにローの考案せる佛蘭西の紙幣發行銀行（Banque Générale）は過度の紙幣發行と株式價值の低落との結果破産し（一七二〇年）、その後半世紀間に互つて佛蘭西では中央發券銀行の設立が不可能となつた。一七七六年に設立された割引銀行（Caisse d'Escompte）も亦革命の爲同一運命を辿り、國庫の爲に過度の紙幣發行を行つた結果破産して終つた。佛蘭西革命の不換紙幣時代と時を同じうして起つた一七九三年の恐慌は英國の銀行制度をも崩壊せしめるに至り、その四年後の一七九七年に英蘭銀行は條令により金兌換を廢止した。

斯くの如く十八世紀に於ては政府の政策により屢々貨幣制度が動搖し、その爲に經濟界も攪亂に陥つた。その爲貨幣制度の改革問題に關する論争に關聯して、屢々一般に恐慌原因を貨幣的要因に求めんとする傾向を生じた。而も當時の支配的經濟論はマーカンチリズムであつたが爲に、この傾向は尙更助長されたのである。蓋し、マーカンチリズムはスミス及び彼の亞流者によつて流布された見解と反對に、常に必づしも金屬主義ではなかつた。確かに初期のマーカンチリストは金屬主義的、地金主義的退藏觀を懷いて居つたとは云へ、後期の人々は保護主義又は商業主義への發展を辿つたのである。然し十六世紀から十八世紀前半にかけ、封建國家が瓦解し、近代國家が成立し、その際從來知行を受けて居つた封建的武士階級に代つて、貨幣を支拂はれる傭兵と官吏とが現はれた結果、先づ貨幣饑饉が一般的事實となり、その爲當時に於て貴金屬、金地金の所有を以つて國富と看做す思想が現はれたのも當然である。斯かる國富の決定的要因を貨幣に求めるマーカンチリズム的經濟觀と當時の恐慌が貨幣の側より惹起されたと云ふ客觀的事實とが結びついて、金融景氣變動論の見解が展開されたのである。

その最も著名なる代表者はジョン・ローである。彼は貨幣數量の増大が經濟過程に及ぼす影響を極く素雜に記述してゐるにとどまる。即ち貨幣數量の増大は商業、貿易を活潑ならしめ、價格の騰貴は凡ての生産者及び國家の收入に有利であると述べるにとどまり、貨幣の數量並にその變動が財貨の循環に如何なる影響を及ぼすかを具體的に述べてゐない。

貨幣數量の變動と財貨數量並にその價格變動との關係を初めて理論的に説明したのは貨幣數量説である。貨幣數

量説は既に古くは十六世紀に於けるジャン・ボードンの所説に迄溯り得る。彼は當時に於ける物價騰貴の原因は貨幣の改惡よりも、寧ろ新世界から流入し來たつた金銀の過剰であると斷言してゐる。この主張は商品價格の高低が貨幣量に直接依存すると云ふことを包含して居り、斯くて既に貨幣數量説が基礎づけられてゐる。この素朴な形態に於ける貨幣數量説は十七世紀に至つてジョン・ロックによつて更に發展せしめられた。然しこの數量説を經濟循環の理論と結びつけたのはデヴィッド・ヒューム(註)を以つて嚆矢とする。

註 David Hume, *Essays and Treatises on Several Subjects*. A new ed. London 1772. Vol. I, part 2, Essay III: Of Money. (1752.)

ヒュームは貨幣數量説を定式化し、『貨幣數量×流通速度＝商品總價×國富』となしてゐる。この定式から彼は一國にとつて貨幣蓄積は無意義であるとのマーカンチリズムとは矛盾した結論に達した。即ちマーカンチリストの説く如く、一國の致富を單に貨幣の蓄積にあると看做し、斯かることを企てる時は却つて物價の騰貴、輸出の減退、輸入の増加を來たし、再び貨幣は國外に流出すとの結論に達した。扱て彼によれば、各經濟主體の所持金が同時に均衡して増加すれば、凡ゆる價格は均衡して騰貴するにとどまると。これに反し貨幣の増加が同時に而も均衡して各人に行き互らず、寧ろ貨幣の流れが最初は一定階級に集まるならば、異つた作用が生ずると。更に詳しく云へば、ヒュームによると、その場合にも價格騰貴が惹起されるが、直接に惹起されはしない。寧ろ價格騰貴の作用が全經濟領域に及ぶには一定の經過期間を要すると。この貨幣増加の開始から價格騰貴の終了迄の經過期間をヒュームは

産業にとつて有利なりとしてゐる。先づ附加的貨幣量を獲得した企業家は生産的投資を企てる。その爲労働者に對する需要が増加するが「労働者は夢にもより高い賃銀を要求しようと思はず、寧ろよい雇主を見出したことを以つて満足する。労働者がより不足して來ると、生産業者はより高い賃銀を支拂ふが、最初は然し又より多くの労働を要求する。斯かる要求に労働者は喜んで従ふ」と云ふのは、これが爲に彼はよりよい生活をなし得るし、従つてその増加した苦勞や疲勞に對し報酬を得るからである。」(註) その際ヒュームは生産物の價格を決定する最も主要な費用たる賃銀が一般に騰貴せざる限り、價格そのものも一般に騰貴し得ないと假定し、次の如く述べてゐる。同時に農民も労働者も市場に於てより多くの、そしてよりよき財貨を購入し得る。」と云ふのは、價格が騰貴してゐないからである(註)と。労働者、農民の財貨に對する購買力が増加する結果、最初は假令生産物の價格が騰貴しなくとも、従つて一個當りの利潤は増大しなくとも、生産數量が増加する故、生産業者の總體利潤は増大す。そして總てこの附加的貨幣が各個人の活動を促進し、産業界の一般的活況を惹起するに至つた場合、初めて一般賃銀、従つて價格水準を高めると。

註 Hume, *ibid.* p. 298.

これと正反對の作用を貨幣數量の減少はなすと。即ち「労働者は凡ゆるものに對し同一價格を市場に於て支拂ふに拘らず、生産業者及び商人から得る仕事は少くなる。農民はその地主に同一地代を支拂はなければならぬに拘らず、自己の穀物や家畜を賣ることが出來ぬ。その結果貧困、乞食、不況が生じなければならぬことは容易に推測し

得る(註)と。

註 Hume, *ibid.* p. 299 f.

斯くてヒュームは貨幣數量の増減に賃銀及び價格の騰落が時間的に遅れるが故に、貨幣數量の増加は好況を、その減少は不況を惹起すとみる。好況は又金の増加によつても、紙幣信用によつても惹起されるが、唯紙幣信用は事實多くの危険を伴ひ、政治的干涉によつて容易に攪亂されると。

ヒュームは景氣上昇と下降とを別々に取扱つたにとゞまり、上昇から下降へ、更に再び下降から上昇への轉換過程を取扱つてゐない。この轉換過程の説明は然し彼の「貿易平衡論」(註)を取扱つた論文に見出される。そこに於てヒュームは二種の比較生産費說に従つて金の地方的並に國際的分配を論じてゐる。金輸入國に於ける價格水準の騰貴は商品輸出を減少し、輸入を増加せしめ、このことは逆に金の輸出を來たさしめ、金の輸出によつて以前の狀態に近づく。

註 Hume, *ibid.* Essay V: Of the Balance of Trade, S. 321 f.

ヒュームのこの價格水準の國際的均衡化の理論を先に述べた不均衡な貨幣増加の作用に關する理論と結びつけるならば、一種の金融的景氣變動論が得られる。と云ふのは、景氣上昇及び下降を惹起す貨幣數量の増減が國際間の金の自動的流出入によつて交互的に惹起されるからである。然し事實ヒュームは景氣循環なる現象そのものを知つてゐなかつたし、従つて又これに對し何等の説明も企て得なかつたのである。

これを要するに、十八世紀の初期資本主義に於ては、既に政治的諸原因により、偶然的な經濟過程の攪亂としての恐慌現象が存したとは云へ、その恐慌は同一回の個々の經驗的事實たるにとゞまり、單に經驗對象に過ぎなかつた。従つて周期的に繰返し現はれ來たる多くの恐慌現象から共通のモメントを抽象し、恐慌の定型を構成し、認識對象を設定することは出来なかつたのである。このことは次章に述べる古典派經濟學者に就いても云はれ得るのである。

三

十八世紀のマーカンチリズムの初期資本主義の時代に於ては、經濟組織の基本構造よりする内生的原因によつて經濟過程が必然的に、而も周期的に景氣の上昇下降の交代過程を示しはしなかつた。然るに十九世紀初葉以來西歐の先進資本主義諸國は自由主義的な高度資本主義の時代に移行した。即ち益々廣範圍に亘る經濟領域が市場經濟化された。マーカンチリズムに對する自由放任主義の實際的勝利は個人のイニシアティブに新たな刺激を與へ、又合理主義的經濟觀念を促進した。他方生産技術の方面に於ても、所謂産業革命により急速な進歩がなされた。

斯く資本主義經濟組織の基本構造は第一に最も發達せる市場經濟と化し、第二にその市場經濟が國家の干渉によらず、營利欲に驅られた個人の自由競争によつて營まれる無政府的商品生産社會となり、第三にその無政府的商品生産は機械の利用による大規模生産となつた。その結果、自由競争と營利欲なる相反の力は一方に於て價格の自由變動を介して需給均衡化の作用を營むと同時に、他方この相反の力は均衡作用を止揚し、剩さへ大規模生産競争を介し

て一般的過剰生産を惹き起すに至つた。茲に經濟組織の内生的原因よりする經濟過程の攪亂たる恐慌及びそれを一環として含む景氣循環が現はれた(註)。

註 拙著『統制經濟と景氣變動』第一篇自由資本主義と景氣變動、參照。

事實十九世紀初頭の諸恐慌、例へば英國の一八〇二、一〇、一五年の恐慌は一七九三及び九七年の恐慌と等しく、經濟的原因によつて惹き起されたものではなく、寧ろナポレオン戦争及び大陸封鎖等の政治的原因に由來するものであつた。然し一八二五年の恐慌を轉期として、内生的原因に基づく恐慌及び景氣循環が現はれた。一八二七年に出版された『新經濟學原理』(Nouveaux Principes d'Economie Politique, Tome I)第二版に於て、シスモンディは次の如く述べてゐる。「人々にして商業通信や、新聞や、旅行者の談を讀むならば、到る所で生産が遙かに消費を越へて過剰であり、斯かる生産は需要に應じてゐるのではなく、寧ろ人々が投下せんとする資本に應じてなされたものであり、商人達の活動も結局は凡ての市場に大勢して殺到する爲、利潤を得んとして却つてその取引に於て破滅的な損失に陷るものであることが明らかとなるであらう。吾々は各種の商品、然し特に大製造國たる英國の商品が伊太利の全市場に溢れてゐるを見る、而もその程度たるや遙かに需要を越へ、その結果商人達にして事實彼の貨幣の一部だけでも回収せんとすれば、利益を得る代りに、三分の一乃至四分の一も損をしてそれ等商品を賣却しなければならなかつた。伊太利から送り返された商品の流は獨逸、露西亞、ブラジルに迄氾濫するに至つたが、然し其處に於ても間も無く同様な障害を見出すに至つた」(註)。

註 Simondi, *ibid.* p. 364.

斯く恐慌及び景氣の循環が客觀的に實在するに至つた以上、當時に於ける支配的經濟學派たる古典派の人々によつてこれ等の現象が理論的に研究されるに至つた。然し古典派の研究對象は次の特長を有す。

一、景氣循環過程即ち回復—好況—恐慌—不況—再び回復の過程中、彼等の研究對象とする所は不況である。

蓋しルッツの指摘してゐる如く『古典派は上昇をも含んだ景氣の問題に對し、恐慌の問題だけを取扱つたに過ぎぬとの主張は最近定説となつてゐるが、この主張は一部正しいに過ぎぬ。正に古典派の人々は全景氣循環そのものを問題とするに至らなかつたから、彼等が上昇を取扱つてゐないことは確かであり、即ち彼等は云はゞ景氣の波の底を研究し、波の上を研究しなかつた。然し彼等に對し恐慌問題を取扱つたと主張するのは誤つてゐる。假令へその際、恐慌と云ふ言葉が突然の動搖と不意の諸企業の破産によつて特徴づけられた好況の中断と解されるにしてもである。古典派の人々が興味を持つたのは、今日の用語を以つてすれば、寧ろラウの云ふ如く、不況即ち取引の沈滞であり、その正に特徴とする所は費用を償ふ價格で以つて一定商品量の販賣が不可能な點にある。』(註)

註 Friedrich Lutz, *Das Konjunkturproblem in der Nationalökonomie*. Jena, 1932. S. 2-3.

然らば何故古典派に於ては不況が中心問題となつたか。蓋し古典派の經濟學は今日の用語を以つてすれば所謂靜態經濟學であり、それは經濟の均衡狀態を研究するのである。經濟の均衡狀態とは、現實に於て不斷に變動する諸經濟現象が正に常に歸向せんとする一定點であり、その一定點に達すれば最早價格は變動せず、靜止し、その價格

に於て凡ゆる有效需要が充されると共に凡ゆる生産物が販賣され、從つて凡ゆる生産要素が完全に利用される狀態を云ふ。斯かる均衡狀態を正常態と看做す以上、その正常態から遊離する變動過程中、第一に好況は研究對象たり得ない。と云ふのは、最早凡ゆる生産要素が利用されてゐる均衡狀態を正常態として前提してゐる以上、斯かる前提からは一般に生産擴張が行はれ、從來よりも多くの生産要素が利用される好況狀態を演繹することが出來ないからである。第二に恐慌も對象たり得ない。即ち恐慌は好況の一定點に於て起る一般的過剰生産であり、一般的販賣不可能の狀態であるが、均衡狀態なる前提からしては價格の低下により常に販賣の可能なることが演繹されるに過ぎない。唯均衡狀態なる前提から演繹され得ることは豫期した價格で販賣の不可能な狀態、即ち販賣の沈滞であり、不況狀態のみである。

二、而も彼等の對象とする不況は頗る一般化され、抽象化されたものである。

勿論古典派の經濟學者が不況の問題を研究するに至つたのは現實に存する經驗的事實の觀察に由來する。然しその提起した問題は可成經驗的事實を思惟によつて純化し、抽象化したものである。當時未だ多くの不況に關する經驗的事實を缺いてゐたが爲に、彼等は現實に與へられた各不況を問題として取扱はず、寧ろ彼等が凡ゆる不況に共通の特徴なりと單に考へたものを選び出し、これを『生産費を償ふ價格に於て商品を販賣することの一般に不可能な狀態』即ち市場の沈滞に求めた。そして現實の不況に結びつく他の多様な規定はこれを偶然の附隨現象として抽象し、單にこの規定のみを獨立に研究した。それは丁度價格理論に於て、特定商品の價格變動の諸原因を研究せ

ず、寧ろ凡ての偶然的附隨現象を抽象して、唯價格變動一般を説明せんとする態度に等しい。それ故彼等によつて提起された不況の問題は最初から非常に一般化され、抽象化されたものであり、既に經驗對象から認識對象に迄純化されてゐたが故に、又純理論的解決も可能であつたのである。

四

斯くて古典派の人々は均衡状態を前提するが故に、その前提から演繹され得る研究對象は景氣變動中不況のみであり、且つその研究方法も均衡理論にとゞまる。このことは最も詳細に不況の問題を取扱つたセイに就いて明瞭に認め得る。

彼の經濟學體系の根本思想を略述すれば、次の如くである。凡ゆる財貨は勞働、資本（この場合生産された生産手段と解されてゐる）土地の三要素の協力によつて生産が營まれると。これ等三生産要素は技術的にして超歴史的範疇たるにとゞまり、決して社會的にして歴史的範疇、従つて本來の經濟的範疇に非らざるに拘らず、彼は直ちに彼の經濟學體系の與件として認めてゐる。企業家はこれ等生産要素を結合し、一定の財貨を生産し、これを市場に於て販賣し、その賣上金を夫々の生産要素に報酬として支拂ふ。この賣上金が如何に生産諸要素間に配當されるかゞ彼の分配論の問題である。その際、彼によれば、賣上金の凡てが企業家の勤勞を含めて各生産要素間に分配されるのであり、而も生産に参加せるものはそれが價值を創造せる程度に應じて報酬を得る。従つて又各生産要素の擔當者はその得た報酬に應じて購買者として市場に現はれると。それ故結局に於て國民經濟全體から見て、生産され

ただけのものが凡て購買されることになる。即ち生産は常に購買力を造り出すのであり、生産と購買力との間には必然的にその全體に於て均衡が成立するに至ると。

セイは斯かる均衡状態を前提し、それから直接不況の問題を取扱はんとする。その結果彼はマルサスへの最初の書簡に次のように述べてゐる。『斯かる前提から私は、自分には自明と思はれる演繹をなしたのであるが、その結論は貴方を驚かしてしまつたやうである。私が述べたことは、要するに吾々が凡て自己の生産物を以つて他人の生産物を買ひ得るのであり、吾々が買ひ得る價值は吾々が生産し得る價值に等しいからして、人々が生産すればするだけ、餘計に買ふようになると云ふことである。従つて貴方が否定したとは異つた演繹がなされるのであり、即ち他のものが生産されぬからして一定の商品が販賣されなくなるのであり、又生産は生産物に對してのみ販路を造り出すのである』（註一）と。セイはこの論理を更に發展させ、一般的過剰生産なるものは存し得ず、唯部分的過剰生産、即ち他の商品が過少に生産されるが爲に、それと交換さる可き一定商品の過剰生産が起るに過ぎないと結論した。『他の商品を缺くが故に一定商品が過剰に存するのである』（註二）と。それ故セイにとつては、不況は單に均衡の部分的攪亂に過ぎないのであり、それ以上何等問題とはなり得ないのである。この見解の正しきことを證明せんとして、彼は一定商品の販賣不良な時は、他の商品の價格が特に騰貴することを指摘してゐる。

註一 Say, Oeuvres diverses, 1848, p. 441.

註二 Say, Traité d'Economie Politique, 6^{ed.} 1841, p. 142.

勿論セイはシスモンディその他の經濟學者と同様、當時に於ける不況の現實に直面し、これに刺戟されて不況の問題を提出したのである。然しその問題自體既に頗る抽象化されたものであると共に、それを解決する場合にも、全く現實の觀察を放棄し、専ら均衡理論から出發し、純演繹的にこの問題を解決せんとしたのである。それ故ルツの説く如く「セイは一定の體系の諸前提からして理論的に演繹をなした結果、次の認識に達したのであり、即ち國民經濟の全生産と全所得とは同一大さなるが故に、兩者の間に均衡が支配する筈であると、それからして彼は當然、一般的過剰生産は存し得ず、經驗に與へられた不況は部分的過剰生産と解す可きであると推論しなければならなかつた(註)のである。

註 Friedrich Lutz, Das Konjunkturproblem in der Nationalökonomie, Jena, 1932, S. 7.

然し、均衡状態なる前提から純粹の思惟作用によつて不況を演繹せんとする純理論的方法を用ひる結果、却つて彼は生産費を償ふ價格で一般に販賣の不可能な不況状態そのものを否定するに至つた。即ちセイの理論體系内にあつては、一般的過剰生産、従つて一般的販賣不可能に對し何等の餘地も存さず、その爲理論家の調和論が不況の事實を否定するに至つたのである。斯かるセイの不況理論に於ける内的矛盾は、生産物の販賣とそれによつて得る購買力とが全體的に見て同一であり、販賣と購買とが統一すると云ふ一面に固執するが故に生ずるのである。既に貨幣が流通手段として一般に使用される資本主義社會に於ては、販賣と購買とは同時に分離される可能性が存するのであり、兩者は對立性の統一をなすのである。蓋し商品生産に際し、生産物を貨幣に轉化すること、即ち販賣は必要條

件である。然し販賣には困難を伴ふのである。と云ふのは、販賣者はその得た貨幣を以つて直ちに他の商品を購入する必要なく、容易にその購買を延期し得るからである。即ち商品は貨幣に轉化されなければならぬが、貨幣は必ずしも直ちに商品に轉化するに及ばないからである。

リカードも、セイと同様、販賣と購買の統一なる一面に固執し、貨幣經濟の發達による兩者の分離、従つて一般的販賣不能の可能性を看過してゐる。即ち曰く「生産物は常に生産物乃至勤勞によつて購買されるのであり、貨幣は交換を實現する手段たるに過ぎない。特定財貨が過度に生産されることがあり得るし、その財貨が過剰に市場に存し得る結果、それに支出された資本が償却されないことがある。だが斯かることは凡ゆる財貨に起り得るものではない」と。それ故リカードは明らかにセイの立場に立つとは云へ、彼は斯かる理論を單にセイより受繼いたのではなく、寧ろセイと同様自己の經濟學體系より必然的に導き出したのであり、且つ多くの點に於てセイの理論を更に深めたのである。

リカードはその主著「經濟及び租稅原理」の序論に述べてゐる如く、その研究對象は社會的總收益が地主、資本家、勞働者の三階級に如何に分配されるかの法則を研究するにあつた。その際彼は分業に基づく經濟、即ち交換經濟を前提し、先づ財貨の交換價值決定の法則を研究した。交換價值の研究に當り、彼は本來貨幣を除外し、乃至は貨幣を全く交換の媒介物に過ぎぬとなしてゐる。一度分業に基づく、貨幣なき、従つて物々交換の經濟を前提し、その下に於ける生産物の分配の問題とする限り、各生産物乃至勤勞が供給されれば、それは同時に同一價值に於て

それと交換する可き財貨の需要を意味するのであり、販賣者は購買者であり、購買者は販賣者であり、結局生産即ち供給されただけのものが需要されるのである。それ故彼は次のように述べてゐる『凡て生産された財貨に對してはその所有者がある筈だ。それは企業家か、地主か、或は労働者かである。常に或る財貨を持つ者は當然需要者であつて、彼はその財貨を自ら消費せんと欲するか、その場合には何等の購買者を必要としないが、それともそれを賣つて貨幣を得、それによつて自ら消費するものか、或は將來の生産に役立つものか、孰れか他のものを買はんと欲する』(註)と。それ故リカードによれば、社會全體的に見て、供給と需要とは均衡する筈である。

註 Ricardo, Notes on Malthus, p. 160-61.

それ故彼に於ても一般的過剰生産——リカードにとつては凡ゆる財貨が自然價格即ち生産費以下で賣られることを意味す——はあり得ないことになる。唯企業家が需要の測定を誤り、一定種類の財貨の過剰生産即ち部分的過剰生産が時に起り得る。然しこれとてもリカードによれば、一時的現象であり、直ちに均衡が回復されると。この均衡回復は彼の經濟學體系の二つの根本前提、即ち企業家の利潤追求欲と欲望の無限性から演繹される。即ち企業家の需要測定の誤謬により、一定種類の財貨が他種の財貨に較べ過剰に生産されれば、その財貨の市場價格は需要供給の關係で自然價格以下に低落する。然しその財貨を從來生産してゐる企業家は利潤追求欲に驅られ、收益を齎らす他の生産に轉ずる。而も人間の欲望の無限なる限り、他種類の財貨は需要され、その財貨の生産によつて收益が齎らされると。

斯くりカードに於ても、セイと同じく、彼の理論體系の前提からして必然的に一般的過剰生産の不可能なることを演繹したにとゞまる。そして現實が示す所の不況の事實は單に一定種類の財貨の市場價格が自然價格以下に偶然的に低落することであり、企業家の利潤追求欲と欲望の無限性によつて間もなく消滅す可きものとされた。彼の不況理論の内的矛盾も亦、發達せる貨幣經濟たる資本主義社會に於て、貨幣が一度流通手段として一般に機能する限り、販賣と購買とが統一をなすと同時に一般に分離し得ることを看過した點にある。

セイ、リカード等は一般的過剰生産を認めざるに、マルサスはシスモンディと共にこれを經驗的事實として認めてゐる。即ち多くの古典派經濟學者は直接自己の經濟學體系を前提とし、それから出發し、一般に損失を伴ふ如き販賣現象は存し得ず、從つてその原因を研究するの必要を認めなかつたに反し、マルサスは事實そのもの、觀察から出發し、この現象の存在を認め、これが原因を究明することを課題としたのである。然しマルサスはその場合彼の反對論者と同様、直接經驗現象を問題とせず、認識對象に迄純化された恐慌一般を問題とし、この恐慌一般の諸原因を研究せんとした。而も彼の研究方法も亦自己の經濟學體系から出發し、純演繹的に研究せんとするものである。

彼の經濟學體系も他の古典派經濟學者のそれと同様、均衡狀態を正常態として前提す。然し彼の均衡狀態は絶對に靜止した均衡ではなく、均衡を保ちつゝ發展するものであり、今日の用語を以つてすれば、動的均衡である。このことは、彼が一般的過剰生産を取扱つた『原論』第二篇に明瞭に現はれてゐる。そこに於て彼は國民經濟の富を増加させる凡ゆる要素、例へば人口の増殖、節約、地味及び労働を節約する發見等の作用を體系的に研究してゐる。

その際は均衡状態に於て唯一つの要素(與件)、例へば資本蓄積が變化した場合、この變化は均衡状態に如何なる作用を及ぼすかを研究する。それ故マルサスは、今日均衡理論に立脚する純粹經濟學が經濟の運動現象を研究する場合用ひる『變化法』(Variationsmethode)なる方法を既に用ひて居るのである。この變化法とは經濟の均衡状態に於て一要素が變化した場合、他の經濟諸要素が如何にこの一要素の變化に順應し、總て新たな均衡が成立するかを研究する方法である。勿論マルサスはこの變化法を今日の純粹經濟學のように嚴格に用ひたのではなく、その假定された變化の作用を常に必づしも新たな均衡が成立する最後の點迄研究したのではない。然し根本に於ては既に彼はこの方法を用ひて居つたと云ひ得る。

彼が研究した諸要素、即ち與件の變化の内で、一般的過剰生産を惹き起し得る與件の變化は唯過度の節約のみであると。彼は普通以上の過度の節約から出發してゐるが、この過度の節約とは、彼にとつては、一國の收益の從來よりもより多くの部分が直接に消費されず、生産的勞働者に當てられることを意味する。それからして彼は次の如く演繹してゐる。即ちこの場合『從來召使として働いてゐた勞働者が資本の蓄積によつて生産的勞働者に變るに至つた結果、彼等のお蔭で市場に異常な數量の各種の商品が存するやうになる、ところが勞働者全體の數は同一にとゞまり、又吾々が假定してゐるやうに、地主及び資本家が消費財を購買する意志も能力も減退してゐる。従つて諸商品は勞働に較べその價值が低下しなければならず、その結果利潤は著しく減少し、更に生産を行ふことが暫くの間停止される。正にこのことがだが過剰生産なる言葉の意味であり、それはこの場合明らかに一般的なものであり、

部分的なものではない』と。

それ故彼の方法は彼の反對論者と同様均衡經濟體系より出發してゐるが、その際變化法を用ひ、體系の與件變化から一般的過剰生産を演繹したのである。ジョン・スチュアート・ミルも亦マルサスに倣ひ、均衡體系から出發し乍らも、變化法を用ひ、一般的過剰生産の可能性を演繹してゐる。彼は信用數量なる與件の變化から演繹して居るのであつて、一時信用數量が膨脹されて後これが縮小される結果、生産費を償ふ價格での一般的販賣の不可能、即ち一般的過剰生産が起り得ると(註)。その場合ミルは信用數量の變化から一般的過剰生産の可能なることを演繹するにとゞまり、この點からして景氣理論を樹立しようとはしてゐない。然しミルは既にセイ、リカードの如く販賣と購買の統一なる一面にしがみつかず、兩者を分離させ、一般的販賣不可能を惹き起させる可能性を貨幣、特に信用經濟たる資本主義の特殊性に求めてゐる點に於て、一步前進したものと言ふ可い。

註 J. St. Mill, Principles of Political Economy, ed. Ashley, Book III, Chapter 12, § 3.

以上述べ來つた十八世紀から十九世紀前半に及ぶ景氣變動論前史の時代に展開された諸理論の内に、吾々は次の如き合理的核心を見出し得るのである。十八世紀の諸恐慌論は景氣循環の一環として恐慌に周期性が存さなかつた爲、個々の恐慌現象を説明するにとゞまり、恐慌問題を經驗對象から認識對象に、即ち恐慌理論の對象に迄高めることが出来なかつた。然りと雖も、恐慌の原因を貨幣的要因に求めることによつて、既に貨幣の流通手段としての

機能による販賣と購買の分離、一般的過剰生産の可能性を明かにした點にその合理的核心を見出し得る。

然るに十九世紀初葉の古典派經濟學者、例へばセイ、リカードの如きは、恐慌否な正確には不況の問題を経験對象から認識對象に高め、不況一般を理論的に取扱はんとした。この點に積極性が認められるが、同時に彼等は均衡理論から出發することにより、恐慌乃至不況そのものの存在を否定する結果に陥つた。

これに反し、マルサス、特に古典派最後の經濟學者と看做されるミルに於ては、一方に於て恐慌乃至不況の問題を経験對象から認識對象に高めると同時に、他方セイ、リカードの如く均衡理論から出發し乍らも、『變化法』を用ひ、恐慌乃至不況の可能性を演繹した。この點に彼等の積極性を認め得る。而もミルはその可能性の要因を信用なる貨幣の側に求めることによつて、再び十八世紀の經濟學者と同一立場に復歸してはゐるが、既に認識對象の理論的解明としてより高い段階に立つてゐる。

然し乍ら、假令へマルサス、ミルは恐慌乃至不況を理論的に取扱つてゐるとは云へ、彼等はその原因を經濟體系の與件の變化に求め、體系内部の要素の變化に求めず、従つて經濟體系そのものにとつては外生的原因に求め、內生的原因に求めざる以上、恐慌乃至不況の單なる可能性、偶然性を説明し得たにとどまる。そして未だその必然性を説明し得るに至らず、不況の必然的法則を本來研究す可き不況『理論』更には恐慌乃至景氣『理論』として發展し得なかつたのである。

獨逸ハンザ衰退期に於けるベルゲンの商業に就いて

高 村 象 平

近著の Historische Zeitschrift や Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte には、本年五月二十二日、伯林大學歴史地理學講座主任ワルター・フォオゲル教授が、五十八歳を以て逝かれたことを報じて居る。同教授が、Geschichte der deutschen Seeschifffahrt. Bd. 1. (1915), Kurze Geschichte der Deutschen Hanse. (1915), Das neue Europa und seine historisch-geographischen Grundlagen. (1921. 2. Aufl. 1922), Deutsche Reichsgliederung und Reichsreform in Vergangenheit und Gegenwart. (1932), Wirtschaft und Raum. (1937) 等の卓拔なる著書により、或はディトリッヒ・シェンフア教授の祝賀論文集や Hansische Geschichtsblätter 誌上を飾る數々の示唆に富む論文によつて、獨逸經濟史界に貢獻されたところ頗る多かつたこと、敢て茲に述ぶる迄もない。教授は又、一九一六年以來伯林の Institut für Meereskunde を主宰されて居り、傍ら一九二六年以後はハンザ史協會の常任理事として活躍されて居た。

獨逸ハンザ衰退期に於けるベルゲンの商業に就いて